

# 東長寺本堂・耐震屋根銅板葺替工事

正面浜縁階段

東序～大間



正面



大間～内陣



向拝・虹梁・獅子鼻

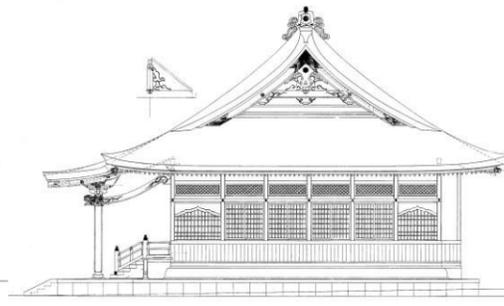
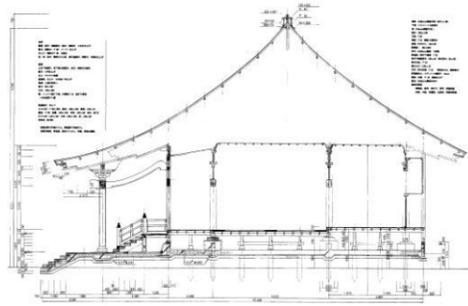
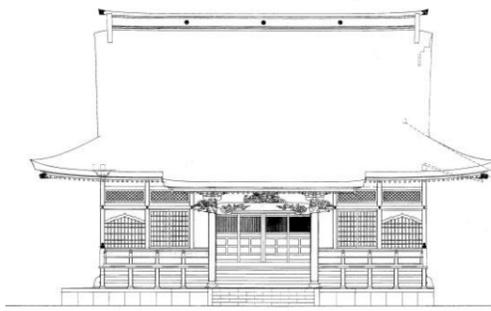
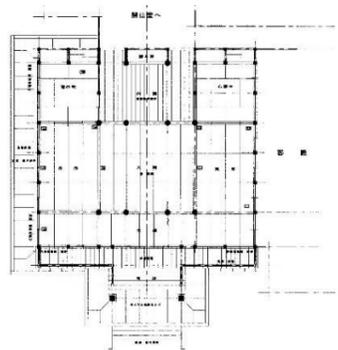


## 東長寺耐震調査（現状）

概要種市城跡にあり開山は、寛永7年 鞭牛和尚(宮古街道 100 里の開さく尽力した。) 建築は、昭和35年 明治神宮・皇居奥宮殿の造営に参加した名工百人の、1人、中村松太郎が携わった。地元の木材、樺、栗、松、杉を、檀家が、寄贈している。

現状地盤は、盛土よる、5cm 巾、長さ 15m の地割れ、基礎の亀裂生じている。

柱、土台、桁は、20cm から 30cm の太い材料使用している。壁は、土壁で、地震による、破損、落下している。小屋組、梁、桔木は、南部赤松材使用しており、しっかりしている。屋根は、鉄板腐食による雨漏りにより、妻壁、野地板に黒カビが生じている。



## 耐震対応策

位牌堂、客殿 2 面に接続して揚屋、曳家が、できなかつたため、建物の高さを維持し松杭を支持層まで鉄筋コンクリート厚さ 30cm 鉄筋 13mmダブル配筋のベタ基礎とし土台下には、御影石を設置した。四隅の窓を耐力壁として、古材は、もろくなっているため、一ヶ所に力が集中する、金物、筋違はさけ面全体で、対応する、木摺り両面の嵐打ちとした。壁は、漆喰仕上として、建具は、ふすまを、板戸とし、外部は硝子戸、内部は障子とした。床下は、吹付断熱 10cm とした。内部は煙の煤の汚れを清め洗ひし、外部は灰汁洗ひとした。浜縁（外廊下）は、予算の関係で、できなかつた痕跡があつたため、復原した。建物の、意匠はそのままに耐震性能をあげることを、重視した。

既存建物調査 木造平屋 屋根鉄板葺 軒破損・腐食 風雪による劣化 地盤亀裂 基礎 4mm亀裂 壁損傷・落下 雨漏り 黒カビ 振れ止め破損



改修工事 地盤改良 松杭



壁板 厚 15



ジャッキアップ



木摺 厚 12 嵐打ち



箕甲垂木 軒付け



基礎亀腹御影石



ベタ基礎 13mmダブル



銅板屋根



懸魚 樺彫刻



鬼銅板打出し

